

講演

「能登の里山里海における世界農業遺産を活用した取組と効果」

石川県農林水産部里山振興室 専門員 能登 史和 氏

石川県の里山振興室の能登です。

先日、日本農業遺産の認定が発表され農業遺産への関心の高まりとともに、最近こうやって講演に呼ばれる機会が多く、また現地の視察も随分増えている状況です。視察については、今年度、石川県を通じて依頼があったものだけでも30件ありました。



先程、紹介がありましたが、「能登の里山里海」は日本で初めて世界農業遺産に認定されました。そして、認定以降に色々な取組を行ってきました。昨年、農林水産省の専門家会議のモニタリングという第三者による評価を受けましたが、世界農業遺産のトップランナーとして高い評価をしていただきました。今日は、こういったことで、呼んでいただけたのかと思っております。

私からは、能登の里山里海がどういった所なのか、また、認定以降どんな取組をしてきたのか、その結果、地域がどのように変わってきたのかといったことをお話しさせていただきます。



こちらのスライドは、能登の里山里海を代表するような場所として、観光地となっている“白米千枚田”です。この“白米千枚田”は、

いちばん最後のスライドにあるように、冬になるとイルミネーションを行うなどの取り組みなどにより、世界農業遺産に認定されて以降、どんどん観光客が増えています。能登の特徴として、海があって、海のすぐ近くまで山が迫っていて、そこにはこのような棚田があるというのが抽象的です。能登にはこういった所が多いです。平場がなく、ほとんどが山といったイメージです。山と言っても高い山がなく、低い山ばかりです。ですから、こういった棚田が広がっている所が多いです。

こちらは、能登の概要です。日本海に突き出た石川県の上半分が能登地域です。県全体の面積の半分ぐらいですが、人口は17%しかありません。面積は東京都と同じぐらいですが、東京都の人口1300万人に対し、能登は19万人です。

5年前に日本で初めて世界農業遺産に認定されました。選ばれたポイントとしては、独自の土地利用や伝統的な農林漁法や祭礼があり、景観も優れていて、生きものも豊富などというところが評価されました。

能登の概要

	石川県全体	能登	割合
面積	4,189㎢	1,978㎢	47%
人口	115万人	19万人	17%

平成23年6月に日本で初めて世界農業遺産に認定

評価されたポイント

- ①独自の土地利用
- ②伝統的な農林漁法
- ③農林漁業と深く結びついた祭礼
- ④優れた里山景観
- ⑤豊かな生物多様性
- ⑥伝統的な技術

世界農業遺産とは、FAO（国連食糧農業機関）により、2002年から始まったプロジェクトです。今は、プロジェクトという言い方から、プログラムという表現に変わっています。プロジェクトとプログラムの違いですが、当初は外部資金で運営していたものが、FAOの正式な事業になったということです。

「世界農業遺産(GIAHS)」とは

FAO(国連食糧農業機関)により開始されたプロジェクト

FAO(国連食糧農業機関)の使命

- ▶ 開発途上国の飢餓の撲滅
- ▶ 品種改良や耕地拡大などの大規模化
- ▶ 「緑の革命」

近代農業の行き過ぎた効率性の偏重

↓

地域の暮らしや文化の衰退
農業・生物・文化多様性の消失

FAOの至上命題は、飢餓の撲滅です。飢餓を撲滅するために、作物の品種改良や農地の大規模化をどんどん進めてきました。これらは「緑の革命」と言われ、非常に生産性が向上し、大きな成果がありました。生産量も増えましたが、一方で、開発途上国での昔ながらの細々とした伝統的な農業が、どんどん消えていきました。食料生産のために昔からあるものを失って良いのかという議論が起こり、そういった世界的な価値があるものを認定して守っていこうというのが、この世界農業遺産の取組になります。

世界農業遺産は、英語の頭文字をとって、GIAHS（ジアス）と言いますが、もともとは“世界重要農業遺産システム”と呼んでいました。石川県が申請する時にはまだ“世界農業遺産”という言い方はありませんでした。ただ、“世界重要農業遺産システム”だとさすがに、ちょっとわかりにくいね、普及しにくいねということで、石川県の谷本知事が“世界農業遺産”という名前にしようということで、それ以降、浸透してきました。



「世界農業遺産(GIAHS)」とは

- ▶ Globally.....世界的に
- ▶ Important重要な
- ▶ Agricultural...農業の
- ▶ Heritage資産・遺産
- ▶ Systems.....制度・システム

略して **GIAHS (ジアス)**

世界重要農業遺産システムでは分かりにくいので、「世界農業遺産」とした

よく言われる世界遺産と世界農業遺産の違いですが、世界遺産はユネスコ（国連教育科学文化機構）が認定しているもので、世界農業遺産も同じ国連ですが、FAO（国連食糧農業機関）が認定するものです。世界遺産は、不動産で、歴史を重視、「～してはならない」、現状を変えないのが基本です。一方、世界農業遺産は、システムを認定するものです。これがポイントになります。システムを認定するものですので、進化する、「～した方がよい」、生きている遺産と言われています。ただ、日本では世界農業遺産という表現が広まったので、普及はしたがシステムが見えにくくなったということも言われています。

「世界遺産」との違い	
<p>世界遺産 世界遺産条約に基づき、顕著な普遍的価値を有する文化及び自然遺産を登録し、保護するもの。</p> <p> (UNESCO 国連教育科学文化機関)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 不動産 ▶ 歴史重視 ▶ 遺跡や建造物が主 ▶ 「～してはならない」 ▶ 現状を変えないのが基本 	<p>世界農業遺産 伝統的な農法と、農業上の土地利用、景観、伝統技術、文化、生物多様性など、「地域システム」を認定し保全するもの。</p> <p> (FAO 国連食糧農業機関)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 農業を核とした仕組み、体制 ▶ 未来志向 ▶ 進化する知恵の遺産 ▶ 「～した方がいい」 ▶ 利用しながらの保全が可能 <p style="text-align: center;">“生きている遺産”</p>

次に石川県の能登の里山里海が評価された点について紹介します。

能登は、大きな山がないため大きな川がなく、農業用水を川から取りにくい状況にあります。そのため農業用水を確保するためにため池がたくさん作られました。能登半島だけで、2,000 を越えるため池があります。ため池があるから、能登の人たちの気質が穏やかになった

と言われる方もいます。大きな川からの取水だと上下流での水争いが激しくなりますが、ため池は集落に1つ2つとか、集落の中で完結するケースが多く、争いがあまり無かったということで、「能登はやさしや土までも」という言葉もあります。あと、先程の千枚田のような棚田とか中山間地の隙間をぬうような谷地田とか、雑木林で炭や薪を取ったりすることが盛んに行われています。



伝統的な農林漁業の視点でも評価されています。その一つの海女漁では、海女の人数は、全国的にはかなり減ってきていますが、能登の海女は、この数十年ほとんど変わっていません。昭和53年に全国で9,000人だったのが、今は1,800人です。能登は、200人前後でほとんど変わっていません。こちら



の写真のはぎ干しはお米を自然乾燥しているものです。自然乾燥は多くの地域でされていますが、能登はこのように何段も重ねて干すのが特徴です。まだこのような古いやり方で行っているところも多いです。こちらのころ柿は、GI（地理的表示制度）に登録されました。産業として工場のような所で大規模にやっているところもありますが、能登では家の軒先で干している風景もよく見られます。これ以外にも、能登野菜などの在来種が残っている地域であり、能登は半島ですから、古い固有の文化が残しやすいと思います。

次に農林漁業と深く結びついた祭礼の視点で、能登は祭りが盛んな地域で、“祭り半島”という言いぶりもされています。能登のキリコ祭りは、キリコと呼ばれる直方体の神輿があり、大きなものでは15mぐらいありまして、それを集落総出で担ぐお祭りがあります。能登にはこういったキリコが700基ぐらいあり、キリコ祭り自体は200箇所ぐらいあります。“あえのこと神事”は、ユネスコの無形文化遺産で、田んぼの神様をもてなす神事です。田んぼが終わった12月5日に、田んぼの神様を家に招き入れてもてなして、2月9日になるとまた田んぼへと送り出します。



里山景観の観点からは、NHK朝ドラ「まれ」の舞台にもなった間垣が評価されました。これは、冬になると日本海から強い風が吹くので、それを和らげるために集落全体をこのように囲い、見事な景観になっています。また、能登はこちらの写真のように白壁黒瓦の家並みが多く見られます。



生きものの観点では、能登沖は暖流と寒流がぶつかる所で、温暖な気候と寒冷な気候の狭間であることから、北限の農作物や南限の農作物も多く、生きものや農作物の種類が豊富です。また、山、里、川、海が相互に水でつな



がっており、生物多様性が育まれています。現在の評価視点では、農業を中心とした生物多様性が育まれているかと観点で評価されることになっており、微妙に世界農業遺産の評価基準が変わってきています。

次に伝統技術の観点です。こちらの写真は、NHKの「まれ」でも紹介された、“揚げ浜式製塩”です。海から水を汲み上げ人力で砂の上に撒いて、それを何度も繰り返して、海水を蒸発させます。そして、濃い塩分が残った砂を集めて、また海水に溶かして塩分濃度の濃い水を作り、釜で煮て塩にします。このように非常に労力と手間のかかる塩作りが、現在でも日本で唯一、能登だけで行われています。



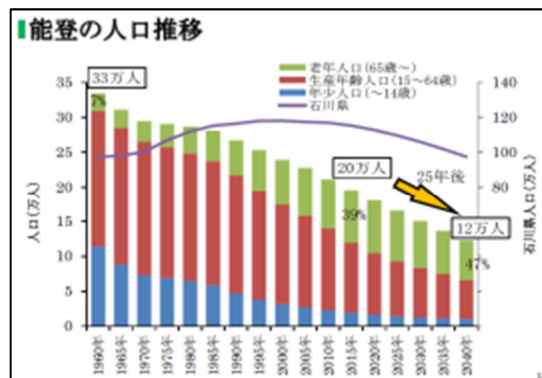
こちらの写真の“ぼら待ちやぐら”も日本で能登だけで行われています。海の上に櫓を組んで、ひたすらボラが入ってくるのを目で見て確認し、ボラが入ってきたら網を引き上げるといふ漁です。ひたすらボラが入ってくるのを待つという信じられないような漁法です。この“ぼら待ちやぐら”は、最盛期には能登に40基ほどあったと言われていましたが平成8年を最後に一度なくなりました。平成24年に復活し、今は3基あります。観光的な意味合いが強いですが、1基だけは現役で今もボラ漁を行っています。このように GIAHS の評価基準となっている古く効率性が悪く小さなものだけ伝統性があるものも残っています。

こういった色々な素晴らしいものがありそうな能登ですが、実は明るい材料ばかりでもなく、厳しい面もあります。能登は半島で過疎・高齢化が進んでいる地域です。平成27年に調査した結果では、基幹的農業従事者の平均年齢が71歳、後継者がいない農家が92%、10年以内に農業を辞める農家が78%という状況です。能登は、産業があまりなく、こ

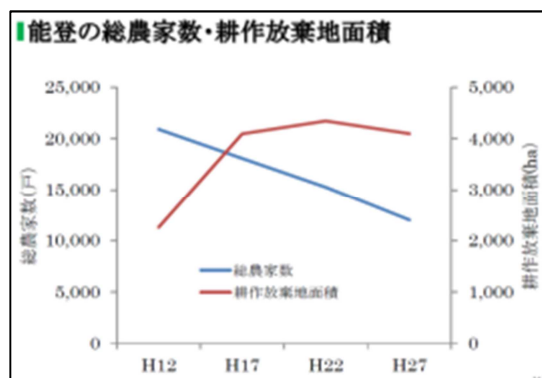


ういった農林水産業や観光が重要な産業となっています。観光面は最近では新幹線金沢開業やNHK「まれ」の放送などで景気がいい状況ですが、農林水産業が廃れると地域が廃れるといった危機感を持っています。

データで見ると、55年前には、能登の人口は33万人だったものが、今は20万人で、お年寄りがだいたい4割です。このまま減り続けますと、25年後には12万人になり、お年寄りは半分近くとなります。石川県の人口はそんなに変わっていませんが、能登はずっと右肩下がりで



もう一つのデータですが、赤色が耕作放棄地の面積で、青色が農家数です。農家数は、予想通り減ってきていて、それに伴い耕作放棄地もどんどん増えて来ていましたが、最近では下げ止まっており、逆に少し解消に向かっています。これは後ほどお話しする色々な取組の成果が現れているのかなと思います。



能登は、こういった厳しい状況にある中で、平成23年に世界農業遺産に認定されました。せっかく認定されたということで、当時はよくわからない世界農業遺産という看板だったけど、何とかして地域活性化につなげようと思いました。色々な取組がここからスタートしました。



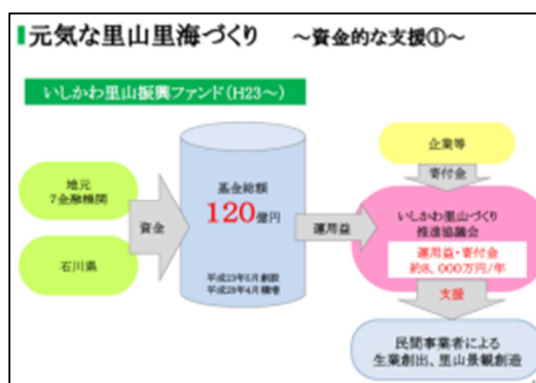
まず、最初に行ったのが組織の立ち上げです。平成23年6月、認定直後に、「世界農業遺産活用実行委員会」を立ち上げました。能登は9市町ありますが、9市町と県と農林漁業や商工などの関係団体が入り、協力し合って地域活性化の取組を進めて行こうとしました。今年度の予算は2,700万円で、石川県がその半分の1,350万円を出しています。市町が残り



りを負担し、9市町で割り、1市町あたり150万円の負担となっています。この

実行委員会は、知事や市長・町長がメンバーで、この下に幹事会があります。実質的にはこの幹事会でいろいろ決めています。昨日もこの幹事会があり、来年度の計画が承認されました。幹事会は年に 5,6 回開催しています。この活用実行委員会では、「世界農業遺産」の活用の方策、推進体制を確保するためのもの、申請団体は、能登の場合は別にあります。それには石川県は入っておらず、市町だけで構成された「能登地域 GIAHS 推進協議会」が申請してアクションプランを作りました。

いろいろな取組を紹介します。まず 1 つ目に紹介するのは、“いしかわ里山振興ファンド”です。石川県の能登がすごいねとよく評価されるのが、このファンドの仕組みです。120 億円の基金を積んで、運用益で事業者を直接支援しています。120 億円の半分が石川県が資金を出し、残りの半分が地元の金融機関が



しています。もともと平成 23 年 5 月に作った時は、53 億円だったんですが、増額しまして今は 120 億円の基金となっています。120 億円あると運用益が 7,600 万円、それにプラスして寄付金が 400 万円あり、年間で合計 8,000 万円のお金が使えます。なかなか行政は、地域活性化の目的であっても事業者を直接支援することは難しいですが、こういうファンドを作り運用している「いしかわ里山づくり推進協議会」が地元の商品開発や地域活性化のイベントを支援しているという仕組みです。

ファンドで支援した事例ですが、ここは能登の耕作放棄地で有機栽培をしています。この耕作放棄地は、国営農地開発事業で、どんどん山を切り開いて畑を作りました。ただ、能登の土は排水性が悪く、今は多くが耕作放棄地になっています。こういった有機栽培を志している人は、まとまった農地が欲しく、また耕作放棄地のため何年も農薬や化学肥料が使われていないので、喜んで耕作放棄地に入って来て来てくれています。耕作放棄地を開いてソバを作ったり大豆を作ったりし、そこで採れたものを使って商品開発をしており、そういった事に対して支援しています。



生業の創出につながるものは、3/4 補助で、3 年間で 200 万円です。地域おこしの活動であれば、2/3 補助で、2 年間で 150 万円です。スローツーリズムの取組も推進しており、年間で 100 万円、イベント関係だと 2/3 補助で、1,000 万円から 1,500 万円使えます。

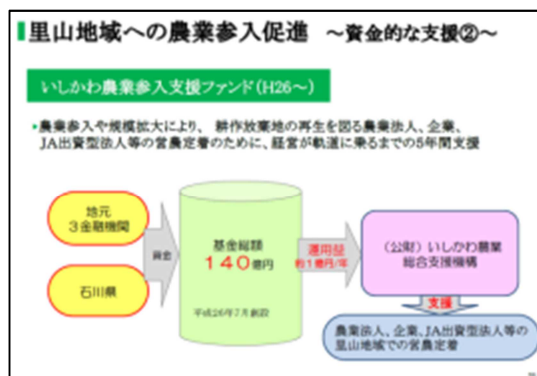
2 つ目の事例ですが、能登では結構有名な春蘭の里という農家民宿群です。この集落はもともと、何も無い集落で目玉というものが本当に何も無いのですが、今はそこに年間 1 万 2 千人の人が来ます。その内、外国人が 1,700 人です。これとって目玉は無いのですが、地元で採れた野菜や魚を使い、輪島塗の赤御膳に乗せて料理を提供しています。そういったことが都市部の方や外国人の方には魅力的でどんどん人が入ってきています。ファンドを使って民宿の外壁の補修とかをやっています。1/3 の補助で 600 万円です。

限界集落ですが、台湾から 30 代の夫婦がここに移り住んで農家民宿をやっています。赤ちゃんも産まれました。過疎・高齢化を脱却するまではいきませんが、新しい取組、地域が元気になるような取組につながっています。



移住者による生業の創出ですが、能登にはこういった茅葺屋根がまだいくつか残っています。茅葺屋根の葺き替えや、葺き替えるためには大量の茅が必要ですので、茅場を作ったりする取組もやっています。

次の取組ですが、これもファンドです。石川県はファンドが好きなんです。いしかわ農業参入支援ファンドというものを作っています。金額は 140 億円で、運用益は 1 億円になります。農業に参入するとき、最初はリスクが大きく、赤字が出ることも多いので、それを補てんするものです。対象地域は、中山間地域と GIAHS 地域です。水稻であれば 15ha 以上



で、1名雇用しなければならないという条件もありますが、1haあたり50万円、野菜であれば1haあたり150万円です。かなりまとまった大規模な参入に対して支援します。

この制度を活用し、植物工場もかなりたくさん入って来ていまして、世界農業遺産の認定以降の企業参入によってだいたい100人ぐらいの雇用を生んでいます。耕作放棄地も減ってきています。耕作放棄地が最近少し減っているというのはこういった所の取組の成果だと思います。



次の制度は元気な里山里海づくりとして、いしかわ版里山づくり ISO 制度を作っています。企業のボランティアの取組に対して認定しています。

いしかわ里山ポイント制度は、保全活動の参加者に対して里山ポイントを付与し、ポイント数に応じて農産物の購入チケットと交換するものです。

いしかわ農村ボランティア制度は、ボランティアを受け入れる集落を受け入れ隊、農村でボランティアとして役立ちたい人を役立ち隊として、受け入れ隊と役立ち隊のマッチングを県が行うものです。役立ち隊の人を金沢からバスを借り切って、集落まで連れて行って1日ボランティアを行い、また金沢まで連れて帰ります。参加していただいた方には里山ポイントを付与します。平成27年度は500人ぐらい参加しています。



行政が主導した取組だけではなくて、農業者が自分で判断して取り組んでいるものがあります。石川県が世界農業遺産に認定された時には、環境保全型農業を進めて行かなければならないという認識がありました。そのため、認定直後に農業者が、農薬・化学肥料を5割削減した“能登棚田米”のブランド化を進めま



した。そして、これが非常に良い取組だということで能登全域に広がり、農薬・化学肥料を3割削減した“能登米”のブランド化が図られています。これらは、通常のお米よりも少し高い値段で売っています。

里山景観保全の取組ですが、景観形成重点地区というものを石川県の条例で設定しています。指定された地区では能登の特徴的な家並みの景観の保全に対して補助制度があります。いしかわ里山振興ファンドを活用します。春蘭の里、奥のと里海日置地区、神子原地区の3地区が指定されています。



祭りの復活ですが、先程紹介したキリコ祭りは、能登では非常に盛んです。日本遺産にも認定されていますが、このキリコは非常に重たく、過疎化・高齢化がどんどん進んできているので、担げなくなってきました。そこで、最近はこのキリコを担ぐのに大学生のボランティアやサークルに入ってきていただいています。この結果、地域が元気になり、大学生と地域に繋がりができます。繋がりができることで、祭りが終わった後も農業を手伝ってくれたり、遊びに来てくれたりします。



伝統文化の継承の取組ですが、この“聞き書き”は、農林水産省の専門家会議や県議会でも高く評価していただきました。地域のお年寄りの名人と呼ばれる方の所に高校生が取材に行って、インタビュー形式で書き起こして冊子にまとめるということをしています。これまでに名人57人、高校生は124人が参加しています。この取り組みを行っているのは、能登と大分だと聞いています。



ブランド化の取組ですが、折角「世界農業遺産」に認定されたので、ロゴマークを貼ってブランド化に繋げ、商品と能登をPRするという取組をやっています。事業者からの要望を受けてこういった制度を作ったわけですが、海女採りさざえ、揚げ浜塩田の塩、“いしり”というお魚から作った醤油、“のとてまり”という大型のしいたけなど32品種を認定しています。認定して終わりではなく、認定した事業者を東京に連れて行って販売する機会なども設けたり、商談会に連れて行ったりしています。「能登」の一品に認定されて以降、販売額を追跡調査してみると、新幹線開業の影響もあると思いますが、平均で2割増加していました。

人材育成の取組です。「能登里山里海マスター」育成プログラムは、金沢大学でやっている取組ですが、隔週で、地域のことを活用して何かを学びたいという人を受け入れて、自分たちで1年間の研究テーマを設定し自分たちで研究し、1年間の終わりに卒業課題として報告します。この里山マスター出身者のネットワークがありまして、こういったことに参加する方は元気な方が多く、元気な人たち同士が繋がって、また新たな取組に発展しており、地域の活性化に自分と貢献しています。今までに、移住者も多いのですが128名が卒業しています。

世界農業遺産を体験し、学ぶ機会を提供しています。これは他の地域でもやられているかもしれないですけど、能登を知っていただき、世界農業遺産のことについても深く知っていただくということで、金沢からバスを借り切って、1日かけて能登を体験していただいています。これを毎回場所を変えて年に4回やっています。これまでに20回開催し、624人が参加しました。定員を超える応

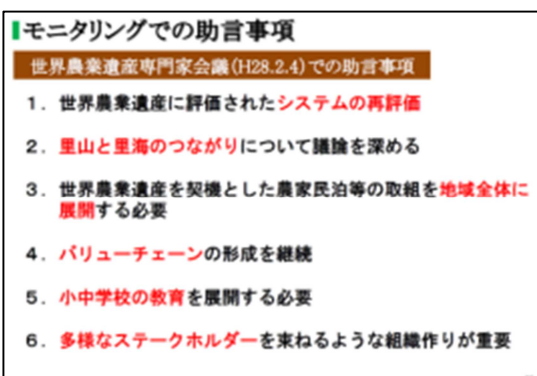
募がありまして、平均して倍率としては2倍ぐらいあります。負担金も3千円とか6千円とか取っていますが人気がある取組になっています。

能登の環境にやさしいドライブをしようということで、トヨタ自動車が「能登スマート・ドライブ・プロジェクト」を始めました。充電スタンドが整備され、電気自動車での快適なドライブができるようになっていきます。能登空港のレンタカーの一部も電気自動車にしています。充電スタンドは無料で使用でき、そこで充電しながらWi-Fiにより観光地情報も取ることができます。34箇所の充電スポットは、協議会が設置したもので、その他にも民間が整備したものが多くあります。NHKの「まれ」の放送もあって、平成27年度の観光客は前年度の2割増となりました。新幹線の開業も相まって、世界農業遺産だけの影響とは言えないのですが、事実として観光客が増えています。



今回御紹介した取組は、ほんの一部でして、他にも世界農業遺産に認定された地域が連携して取り組む“広域連携推進会議”を主導して作ったり、昨年度のミラノ博にも石川県が主導して参加したり、国際貢献としてはイフガオとの連携などもやっています。

昨年度に、農水省の世界農業遺産専門家会議により、認定地域がどうなっているかといった評価を受けました。良い評価もありましたが、助言事項としては6つ出ました。今後認定をめざす地域では、こういったことも参考になるかと思えます。



まず、システムを見直さなさいということ。これはかなり強く言われまして、能登は最初にも述べましたように、6つの点で評価され認定を受けましたが、あまりシステムっぽくないんですね。農業遺産はシステムが大事と言われていています。今後の認定を目指すには、やっぱりシステムが重要になると思います。

2つ目は1つ目の関連になるのですが、里山と里海のつながりが能登のポイントであり、そのつながりを見えるようにしなさいということです。議論をなささいということで、活用実行委員会の幹事会の終わりに議論する場を設けまし

た。

3つ目、農家民泊の取組は、春蘭の里がリーダーシップを取ってやっていますが地域が限定的で、もっと面的に広げる必要があるということ。能登は9市町が対象ですが、国内の認定地域で一番多く、9市町全体に広げるのは大変だけど、ピンポイントでやるのではなく、9市町全体に普及する取組も進めなさいということ。

4つ目、バリューチェーンの形成ですが、世界農業遺産に認定されたからには、認定効果を使って地域を活性化させなさいと。分かりやすく言えば、能登の一品のようにブランド化して地域にお金が落ちる仕組みを作りなさいということ。

5つ目も強めに言われました。小中学校の教育をやりなさいと。高校生を対象とした取組はやっているのですが、小中学校対象はあまりやっていません。生きもの調査はしていますが、実際に聞くと、世界農業遺産のことを教えるというよりも、環境保全活動のようなところに注力しており、システムの話には及んでいません。世界農業遺産の深い理念をもっと広く普及しなさいということ。これについては、来年度、小学校向けの副読本を作って、出前事業の仕組みを作ろうとしています。

6つ目は、どこの地域でも言われることでしょうか、行政だけが引っ張っていくのではなく、民間やいろいろな団体が一緒になって取り組んでいきなさいと。能登はそういった取組を始めているので、駄目という言い方ではなく、改めて大事だからやっていきましょうという言いぶりでした。

最後ですが、世界農業遺産に認定されて、何が変わったかと言うと、地域が一番変わった、地域の人々の想いが一番変わったと言えます。もともと能登というのは、過疎化、高齢化が著しく進んでいる地域で、なかなか明るい材料が無かったんですね。そこを国際機関が認定してくれた、まだまだ捨てたもんじゃないねと、そういった価値のある地域なら守っていこうと、守っていくなら世界農業遺産の看板があるのだから、それを活かして活性化させようという気持ちが出てきました。これが一番大きいことだなと思います。

結びに

- ▶ **世界農業遺産は、展示保存型の遺産ではなく、社会・経済状況、環境などが変化していく中で、「現在進行形」で営まれている地域の暮らしそのもの**
- ▶ **世界農業遺産の認定は、地域住民が「当たり前だ」と思っていた、いわば埋もれていた地域の暮らしや資源に「光」を当て、むしろ地域の「宝」であるということを再認識**
- ▶ **地域住民自らが地域のすばらしさを「再発見」し、地域に「生きる自信と誇り」を取り戻し、地域の活性化の動きに結びつけることが大切**

これは、一番最初のスライドにあった“白米千枚田”の“あぜのきらめき”です。これはペットボトルに独立式のLEDを入れて、2万1千個あり、ギネスにも登録されたこともあります。御清聴ありがとうございました。

